



THE SERVICE CLUB OF THE YMCA  
 AFFILIATED WITH THE INTERNATIONAL ASSOCIATION OF Y'S

# The Y's Men's Club of Kanazawa

CHARTERED JULY 9, 1947

c/o KANAZAWA YMCA 44-1-202 SATOMI-CHO KANAZAWA 920-0998

国際会長主題	「世を照らす光となろう」	“Be the Light of World”
アジア地域会長主題	「歳月はY'sをワイズ(賢者)にする」	“Years Bring Wisdom”
西日本区理事主題	「先頭にたつてワイズの光を輝かそう クラブで、地域で、国際社会で」 “Let's Ysmen Light Shine before Others, in the Club, in the Community, in the World”	
中部部長主題	「前へ！声を掛け合い1」	“Go forward! Call Together”
金沢クラブ会長主題	「より楽しく・より豊かに 伝えようワイズワールド」	

## 2013 5 月間強調 LT (leader - training)

今日の聖句		5月強調月間	
<p>わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。          ヨハネによる福音書 15章5節</p>		<p>ワイズメンに対するクラブ内のトレーニングができていますでしょうか。ドロップアウトを減らすためにも考えてみましょう。          成瀬晃三理事(名古屋クラブ)</p>	
5月例会プログラム		4月クラブ活動状況	
とき	2013年5月16日(Thu.) 18:30~20:30	第1例会	(4月18日 Thu.)
ところ	金沢ニューグランドホテル	メン	: 数澤、高口、幸正、澁谷、清水、西、西尾、山内、山本 (9名)
会費	¥3,000(会員不要) ¥2,000(メット)	メキップ	: 伊藤
開会・点鐘	司会 伊藤仁信君	出席率	: 100%
主 題	幸正一誠会長	メネット	: 数澤、高口、澁谷、山本 (4名)
ワイズ・ソング	司 会 者 一 同	ゲ ス ト	: 荒川中部部長、(四日市クラブ) 若松、大西、郷戸、(金沢犀川クラブ) 平口、北、澤瀬、植松茂の各氏 (8名)
今月の聖句	司 会 者 幸正一誠会長	コメット	: 西尾 (1名)
ハッピー・ハーベストイ	山内ミハルさん	第2例会	(4月1日 Mon.)
ゲスト紹介	西 信 之 君	メン	: 伊藤、数澤、幸正、澁谷 (4名)
食前の感謝	~~~~~ 会 食 ~~~~~	メネット	: 数澤、山内 (2名)
スピーチ	ロバート カニンガム氏	ニコニコタイム	24,500円
“Christians, Money and Giving”		クラブファン	累計 129,100円
委員会報告	各 委 員	B F ポ イ ン ト	
ニコニコタイム	西尾一朗君	切手	0 kg 累計 0 kg
YMCAの歌	一 同	現金	12,000円 累計 12,000円
閉会・点鐘	幸正一誠会長		
会 長 幸正一誠	書 記 山内ミハル	第一例会	: 毎月第三木曜日 18:30~20:30 金沢ニューグランドホテル Tel (076)233-1311
副会長 澁谷洋太郎	会 計 高口 昇	第二例会	: 毎月1日 18:30~20:00 金沢ニューグランドホテル 2F (トレド)
前会長 数澤輝夫	メット会長 数澤淑子		

## ロバート・カニングム氏 プロフィール

トリニティ国際大学大学院 博士

1972～1991年 国際福音宣教会 (OMF) として日本で宣教活動

1975年～1980年 青十字サマリア館初代館長

1991～現在 高機能障害成人のための施設設立

1992年 厚生省の外国人アドバイザーとして活動する。

2013年 アクアフォニックス・プロジェクト設立

2013年4月 北陸学院大学学長に就任

## 主イエスとの出会い

数澤 輝夫

「己が身を神の悦びたまふ潔き活ける供物として献げよ、これ霊の祭りなり」(ロマ12・1)

私は1952年12月21日クリスマス礼拝のときに金沢広坂教会(現在の金沢長町教会)で古川忠茂牧師から受洗しました。この受洗記念にいただいた聖書に冒頭のみ言葉がしるされています。このみ言葉は信仰生活の道しるべとなり、この聖書は大切な宝物となっています。教会との関わりはこれより一年前の初秋、或る日曜日に金沢広坂教会の礼拝に出席しました。私はキリスト教の知識はまったくありませんので、礼拝堂の片隅でボンヤリと椅子に腰かけていました。礼拝が始まり讃美歌を歌うときに、一人の姉妹がうしろから「聖書と讃美歌です、どうぞ・・・」と私に手渡してくれた。その讃美歌には「山田美智子」と記名されていました。それからはこの姉妹は何時も必ず「次の集會に休まないで是非いらっしゃいネ」と笑顔で声をかけられました。お陰で諸集會によく出席して、主のみ言葉にふれる機会が多く与えられたのでした。この事柄は何気ない事かも知れませんが、私にとってはこの姉妹との出会いは生涯忘れられない心温まる思い出となっております。その後、主イエスとの出会いにつながることになったのであります。受洗後、直ちに日曜学校の奉仕にたずさわることになり、子ども達に主の福音を宣べ伝えながら、自分の信仰をも深める恵みに預かることにもなったのであります。

山田美智子姉はその後、牧師夫人として伝道者のよき補佐役をされていらっしゃいます。

私は電電公社に勤務していたので、毎日曜日の朝は厳しく大変なことも多々ありました。しかし、十字架の愛と豊かな恵みのもとで祈りつつ、主のみ言葉を伝える大切な種まきの業に参加できたことを感謝しつつ、

すべてを育て給うかたは全能の神であることを信じて励んでまいりました。若き日の思い出の一端であります。

## 【4月例会報告】

4月は久しぶりに新入会者を迎えるといううれしい例会となりました。清水淳氏、西信之氏と私、山内ミハルの3名です。

荒川中部部長はじめ、四日市クラブ、金沢犀川クラブの方々のご臨席をうけ、和やかな中にも緊張を感じる入会式でした。



幸正会長による入会式辞 神妙に聞き入る3人



ワイズバック装着を終えてホッとして……。記念撮影。右から幸正会長、荒川中部部長、西信之君、清水淳君、山内ミハルさん



入会式を全員起立で見守って下さった皆さん

清水淳さんは、1961年生まれ。七尾市出身で大阪市立大卒。1980年より富山Yリーダーとして活躍され、富山クラブに4年ほど在籍。この度北陸銀行ドリームセンタームサシに転勤となり、金沢クラブに入会されました。

西信之さんは、1945年生まれで長崎市出身。九州大学大学院卒で、金沢大教授 工学博士 燃料電池の実用化を研究中。

山内ミハルは 20 数年メネットとして、ワイズライフを楽しませていただきましたが、夫健司が2月に天に召され、この度メンとして登録させていただきました。女性会員を認めるのは、金沢クラブ67年の歴史の中で初めてのことです。金沢クラブに新しい歴史を作ったことに感謝しています。皆様の足手まといにならないよう気をつけながら、これからも楽しませていただきますのでよろしくお願いいたします。



植松氏と会長 挨拶

スピーカーには、北陸放送の元アナウンサー、植松茂氏を迎え、「声と言葉と目」一声と言葉の使い方、目の表情は心の窓ですーと

題して、お話をいただきました。氏は初めに、第2次世界大戦の被災体験から話し始められました。当時中学生であった氏は、群馬県の前橋市に住んでおられ、お父さんは勤め先へ、お母さんは弟妹と共に疎開しておられ、一人留守を守っているとき、B29の爆撃にあったということです。街中火の海となった中、いくつもの死体を飛び越しながら、郊外へと逃げ延び、翌朝自宅に戻ると、息子は死んだものと思い、その死体を探していたお父さんに会い、「無事だったか」と抱きしめられたことが、今も忘れられないという。体験談を通して平和を訴え続けることが、戦時中を経験した高齢者の責務だと思っているとのこと。同感です。

続いて、私たちの声や言葉に対する関心は、空気や水と同じように、日常ほとんど無意識に過ごしているが、言葉は人間だけが持つコミュニケーションの道具

だという。上手に美しく言葉を使うことで、仕事の面でも、人との付き合いの面でも、より素晴らしい将来が開けるはずだとのこと。人の声には、高低、強弱、太い細い、透る声・だみ声等様々な声があるが、声の良し悪しは二の次で、「心」が「言葉」をいきいきとさせる。目や手、顔全体も「話し」の手助けをしてくれるということで、「ア、イ、ウ、エ、オ」の五音節使って何人かの人に高低テストが行われました。

また、古典や近代文学の名作・名文、詩歌などを全文でなくてもよいから、声を出して読めば、黙読ではわからなかったことが見えてくると、室生犀星や夏目漱石の名作の一部を、暗唱してくださった。

話し上手になる日常の心がけとして次のように話されました。

- ①毎日、発音・発声練習を最低10分続ける。
- ②高い声でこちらから挨拶の言葉をかけ、一言加える。
- ③相手の目を、柔らかい視線で見ながら話す。
- ④相手の話に、相づちを入れてうなづく。
- ⑤相手のプラス情報を仕入れておく。
- ⑥自分の言葉のクセを知る。敬語の使い方を身につける。
- ⑦流行語、若者言葉はさける。
- ⑧ラジオ・テレビを利用して、アナウンサー・タレント・声優のセリフなどの後をつけて声を出してみる。
- ⑨旅行や買い物の際、一緒になった人や、お店のご主人・奥さんなどに意識して話しかけてみる。
- ⑩他人同士の会話にも耳を傾け、よい点、悪い点が聞き分けられるようにする。

私たちが美しい会話ができるよう努力しましょう。最後に皆さん全員で記念撮影をしました。

(文責 山内ミハル)



平均年齢は少し下がったかも...

6月の担当

ブリテン執筆： 幸正 一誠君、高口紀子さん  
 卓話担当： 幸正 一誠君  
 原稿は5月25日までに山内までお願いします。

Happy Birthday

メネット 幸正まり子さん 5月19日

滋賀蒲生野クラブ・金沢クラブ合同例会

『焼牡蠣パーティー』

幸正 一誠

4月6日～7日の1泊2日で能登エリアにて滋賀、蒲生野クラブとの合同例会が行なわれました。今回の「おもてなし」コンセプトを『滋賀蒲生野に無いものを提供しよう』とし、その目玉は6日の夕食の中島産焼牡蠣、7日の能登島水族館のジンベイザメの見学。

牡蠣が炭に炙られパンパンと弾ける様子に全員驚かれた様子で弾ける度に奇声があがっていました。程よく焼けた牡蠣の中にワイン、日本酒、ビールを注ぎ牡蠣酒を味わいました。牡蠣は中島産の特に大きい物を用意して頂き、全員白い紙エプロンを首から掛け、左手には軍手をし、右手にはオイスターナイフを持ち焼牡蠣とのバトルをワイワイ・ガヤガヤと楽しみました。翌日は能登島水族館で、ジンベイザメは勿論、「イルカショー」も楽しみ、昼食は魚づくし定食を美味しく頂き、帰路に着きました。

今回の合同例会で両クラブの親睦がより一層深まった事に感謝申し上げます。滋賀蒲生野クラブ・金沢クラブの皆さん、本当にありがとうございました。

~~~~~ お知らせ ~~~~~

☆東日本区大会

日 時：6月8日（土）～9日（日）

登録費：18,000円

参加予定：幸正、伊藤、数澤、澁谷

この時、仙台廣瀬川クラブとのDBC締結を行う予定

☆西日本区大会

日 時：6月22日（土）～23日（日）

場 所：名古屋能楽堂

登録費：20,000円

参加予定：幸正、伊藤、数澤、山内、  
山内

~~~~~ YMCAのお知らせ ~~~~~

☆早天祈祷会

日 時：2013年6月1日（月）6：00～

場 所：金沢YMCA集会室

☆たけのこキャンプ（報告）

4月29日（月・祝）北陸学院大学内竹林に於いて、参加者22名（子供6名、大人16名）内、金沢クラブからは、数澤、幸正、澁谷の3名が参加しました。当日は天候に恵まれ、みんなでたけのこ掘りに汗を流し、子どもたちは自分で掘ったたけのこに大喜びでした。

竹林のなかで美味しい竹の子御飯やみそ汁をいただき、自然の恵みに感謝のひと時でした。（数澤輝夫 記）



~~~~~ ネット報 ~~~~~

今まで出会った方言

前回の例会で、植松氏のお話を聞きながら、特に子供たちの話す金沢弁のところでは「そう、そう」と一人で納得してうなずいてしまいました。そして私自身の子供の頃の思い出などが蘇ってきました。私の両親は石川県出身ですが結婚後東京に行き、埼玉で私と弟が生まれました。私が小学校5年生の時、今の石川県かほく市へ転校したのですが、その時の一番の違和感やはり言葉でした。転校により「ぼく、あなた」の世界から「わし、われ、それ」、「～しまっし」、「～やじー」、「～するこっちゃ」、「そんなことすんなま」、「だら！」（「だら」って何？）の世界に変わりました。

どうしても方言になじめずというか、あえて拒否していたと思います。少しはいじめられましたが、それでも先生方のおかげで友人も少しでき、何とか地元の中学へ進学することができました。けれど、小学2年生で転校した弟は大変だったようで、地元の中学には進まず、金沢市内の中学に行くことになりました。小さな子供の世界では遠慮や容赦はないはずで、弟は結

局大学から東京にでてしまい石川県に戻って本格的に生活することは一度もありませんでした。

それに比べると私の息子達は5・6歳の時、東京から山形県に転校した時、あっという間に山形弁で喧嘩するようになりました。「～とかにゃ」、「～してける」、「～だずー」、「～だべ」、「～は↑」とにぎやかでした。友達もたくさんできて、今でも山形は楽しかったと話しています。

その後、石川県に転校した時も、すぐに金沢弁で話すようになりました。今は東京で、すまして東京弁で話しています。息子達は言葉のカメレオン体質です。子供の世界では、その土地の言葉で話してこそ、その土地の人間として仲間として、認めてもらえるのだと思います。私が言うのはおこがましいですが、方言は文化であり大切に守ってほしいものです。

（山本 典子 記）